



👁️👁️ みどころ

オリジナル脚本にこだわる吉田恵輔監督の、兄妹の物語、母娘の物語に注目！

いきなり「母親です！」と言われて同居を迫られるのもイヤだが、同居後のケンカのくり返しの中、さっさと死なれるのももっとイヤ。しかし、納骨のために母親の故郷を訪れてみると、麦子はいつの間にか若き日の母親・彩子に・・・。

そこから展開される、笑いあり、涙ありの脚本に拍手！そして聖子ちゃんの『赤いスイートピー』に秘められた母娘のストーリーに涙・・・。シネコンでの大ヒットはしんどいかもしれないが、堀北真希、松田龍平、余貴美子のビッグネームだから、小ヒット程度は期待したい！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■シネコンでの公開だが、この入りで大丈夫？■□■

2014年正月の映画館は『永遠の0』（13年）（『シネマルーム31』132頁参照）と『ゼロ・グラビティ』（13年）が二大人気。そのうえ、邦画では『かぐや姫の物語』（13年）、『利休にたずねよ』（13年）（『シネマルーム31』181頁参照）、『武士の献立』（13年）等が、洋画では『ハンガー・ゲーム2』（13年）、『大脱出』（13年）等の話題作がラインナップされている。そんな状況下、本作のような前宣伝の少ないオリジナル作品がTOHOシネマズ梅田、難波、西宮OSという超豪華なシネコンで上映されていることに驚くと共に、株主優待券を使ってはじめてTOHOシネマズ西宮OSへ行くことに。

阪急の西宮北口駅に「西宮ガーデンズ」という巨大な商業施設が誕生したことは知って

いたが、その中を歩きTOHOシネマズ西宮OSの中に入るのは今日がはじめて。その施設全体の豪華さに驚いたが、『麦子さんと』はシネコン内の大きなスクリーンが割り当てられていたにもかかわらず、私の予想どおりその入りはごくわずか。こんな入りでは、たちまち小さなスクリーンに変更されてしまうのでは・・・？私の理解では、本作は本来TOHOシネマズのようなシネコンで上映される映画ではなく、テアトル梅田のような「単館」で上映される方がふさわしいと思うのだが・・・。

■吉田恵輔監督に注目！■

本作を監督・脚本した吉田恵輔監督を私は特に意識していなかったが、パンフレットを読んで、『純喫茶磯辺』（08年）（『シネマルーム20』318頁参照）の監督で、オリジナル作品にこだわっている監督であることがわかり、本作のチャレンジに納得。本作は、自身のオリジナルな企画にもとづく小さな作品ながら、①ヒロインの麦子役に堀北真希②その母親の赤池彩子役に余貴美子③兄の小岩憲男役に松田龍平、という3人のビッグネームを起用しているから、製作費の大半はその出演料？

もっとも、この3人以外は、麦子が亡くなった母親・彩子の納骨のために訪れた彩子の故郷ではじめて出会う④タクシー運転手の井本まなぶ役に温水洋一⑤旅館を営む麻生春男役にガダルカナル・タカ⑥その妻の麻生夏枝役にふせえりというギャラの安い俳優(?)を使っている。本作後半に大きな存在感を見せる、彩子の友人で今は故郷の霊園に務めている古里ミチル役にも麻生祐未という絶妙のバイプレーヤーを起用しているが、そのギャラもそれほど高くはないはずだ。さらに、本作は山梨県の都留市がロケ地となったが、そこで多くの地元の人たちの協力を得ていることがよくわかる。

私は昨年6月に友人であり依頼者でもあった塩屋俊監督が突然亡くなったことに大きなショックを受けたが、その中であらためて映画づくりの苦労の大半はカネ集めの苦労であることを実感させられた。ちなみに、本作は吉田恵輔監督が構想から8年をかけて実現させた映画だが、パンフレットのプロダクションノートを読むと、『純喫茶磯辺』の完成前にすでに脚本の第一稿を書きあげており、09年のクランクインを目指していたが、不景気の煽りを受けて製作中止になったと書かれている。すると、吉田監督も本作のカネ集めには相当苦労したはずだ。そんな苦労をしてやっと完成させた本作は、『キネマ旬報』1月下旬号のREVIEWでも3人の評論家が4点、3点、5点をつけているから評価が高いし、私の目にもかなりの名作！塩屋俊監督亡き今、私はこの吉田恵輔監督に大いに注目したい。

■あなたは上戸彩派？それとも堀北真希派？■

今や若手美人女優の双璧に成長したのが、上戸彩と堀北真希の2人。しかして、今年のお正月は、上戸彩が高良健吾と共に主演する『武士の献立』と堀北真希が主演する『麦子さんと』が激突！上戸彩は昨年の大ヒットドラマ『半沢直樹』で直樹の妻・花役として大きな存在感を示したが、ならば負けじと、堀北真希は2012年のNHKの朝ドラ『梅ち

さん先生』での主演に続き、2013年のテレビドラマ『ミス・パイロット』の主演で対抗！

堀北真希が『ALWAYS 三丁目の夕日』(05年) (『シネマルーム9』258頁参照)で第29回日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞した時は、17歳の時だったから、まだ幼さが残る田舎からの集団就職組という感じがピッタリだった。しかし、本作では、吉田監督の意図したとおりの、複雑で微妙に揺れ動く娘心を繊細に演じたのはもちろん、春男がエロおなじ風のように、黒の喪服姿が何とも美しい。『武士の献立』はNHKの現在の朝ドラ『ごちそうさん』と同じように、料理の数々には満足できそうだが、いまいちストーリーは単純だろうと思って観ていない。しかし、堀北真希派になるか、上戸彩派になるかを定めるためには、近々それも鑑賞しなければ・・・。

■この兄妹の姿は『昭和枯れすすき』とは大違い！■

本屋でアルバイトをしながら声優を目指している23歳の麦子は、今兄の憲男と2人で貧乏暮らしをしていた。なぜ、この兄妹には両親がいないの？なぜ、アパート（とはいっても今ではやはりマンションだが）で2人暮らしをしているの？そんな設定を見ると、私は高橋英樹と秋吉久美子が兄妹に扮した名作『昭和枯れすすき』（75年）(『シネマルーム10』55頁参照)を思い出す。そこでは、警察官の兄は妹の父親兼母親代わりとして大きな愛を注いでいたが、本作にみる兄・憲男は言葉遣いを聞いているだけでも頼りなさそうだ。

そんな兄妹の生活に大きな波紋が生じたのは、母親の彩子が突然2人の部屋を訪れ、家族で一緒に住もうと言い始めたためだ。憲男が自分の母親のことを「ばばあ」と呼んでいるのはいかにも今風だが、それでも「子供を棄てて出て行ってくせに今更一緒に住もうなんて虫が好すぎる！帰ってくれ！」と堂々と言える憲男はマシ。それに対して、母親が子供を棄てて出て行った時はまだ小さかったため母親のことをロクに覚えていない麦子は、何も言えず戸惑うばかりだ。もちろん、麦子も同居話については憲男がしっかりとねづけてくれると思っていたが、憲男は意外にあっさり彩子が転がり込んでくるのを認めたから、麦子はビックリ。憲男が「折れた」のは、「同居しないのなら、毎月の生活費の送金を打ち切る」と脅されたためらしいが、憲男は母親から毎月15万円もの送金を受けていたの？すると、「お前は俺が養っている。家賃をはじめ生活費は大変なんだ！」といったも恩着せがましく言っていた憲男のセリフは、一体なんだったの？まさに『昭和枯れすすき』に見た高橋英樹が演じた立派な兄貴像とはえらい違いだ。

さらに、彩子が転がり込んでくると、憲男はシャーシャーと「恋人から同棲しようと言われたので」と言って入れ違いのように一人出て行ったから、母親とはいえ、ほとんど見ず知らずの人とこれから2人で暮らしていかなければいけない麦子は大変。これから先が思いやられる。そう思っていると、案の定・・・。

■□■吉田監督の脚本は意外な方向へ急展開！■□■

父娘関係も難しいが、母娘関係は同性同士だけにうまくいけばいいが、いったん対立すると父娘関係以上に大変らしい。母親の彩子役之余貴美子は、本来は上品な美女役が似合う女優だが、本作では「大阪のおばちゃん」的な、厚かましさを全面に押し出した彩子役を演じている。したがって、兄の憲男と入れ代わりにそんな存在がドーンと加わってくると、麦子のイライラはつるばかりだ。あのけたたましい目覚まし時計でも目を覚まさないこのおばさんは、ホントに人間？いい年をしてなぜ、『赤いスイートピー』を口ずさみながら家事をしているの？そのうえ、バイトだけではなかなか貯められない声優学校への入学金を憲男に頼むと、憲男からにべもなく断られてしまったから、今や麦子のイライラは頂点に・・・。

そんな状況下、家に帰ってみると、自分宛てに届いていた声優学校からの封筒が勝手に開封されていたから、まさにアンビリャブル。さらに、あろうことか、彩子はいかにもまともな母親風に、声優学校に入ること自体を心配し始めたから、麦子はずいぶん「私、あなたのこと母親とと思ってないから・・・」と、本心とも強がりともつかない、何とも強烈な言葉を。そんな麦子の言葉に対して、彩子はどんな反応を？ここで口論がエスカレートし、大喧嘩になれば普通の母娘なのだろうが、さて彩子は・・・？

この後、この母娘関係はどのように展開していくの？そんな風に考えていると、意外にもアッサリ彩子は末期の肝臓ガンで死亡してしまったから、吉田監督の脚本の意外な展開にビックリ！

■□■麦子と彩子は瓜二つ！！それが最大のポイントに！■□■

本作は冒頭の「つかみ」のシークエンスが面白い。それは母親の遺骨を持って五藤駅に降り立った麦子が井本（温水洋一）の運転するタクシーに乗ったところ、バックミラーを見た井本から「彩子ちゃん？」とびっくりされるシーンからスタートする。そこから次々と展開していくシーンを見てわかるのは、麦子が死んだ母親・彩子と瓜二つだったということ、そしてまた、アイドル歌手を目指していた彩子はこの町のアイドル的存在で、町の男たちの憧れの的だった、ということだ。そんな五藤町に再び彩子と瓜二つの麦子が現われたのだから、井本も春男（ガダルカナル・タカ）も、さらに五藤町の男たちはみんな大興奮。麦子が泊まった春男の旅館に、五藤町の彩子を知る男たちが次から次へと押し寄せてくるシーンはメチャ面白い。

麦子が五藤町にある彩子の故郷を訪れたのは、四十九日を迎えたこの日に彩子の遺骨を埋葬するためだが、ここでも憲男は仕事にかこつけて、その処理を麦子に押し付ける始末。もっとも、麦子にしてみれば、突然同居を申し出てきて、あれこれとケンカの末、勝手に死んでしまった彩子について、母親を亡くしたという実感もないまま、儀礼的に彩子の故

郷を訪れたにすぎなかった。したがって、五藤駅に降り立った途端に起きた「彩子ちゃん！彩子ちゃん！」の大合唱には戸惑ったが、それも納骨手を終えればすべて終了。そう思っていたのに、何とここで埋葬許可証を失くしてしまうとは！

兄の憲男からも「これは大事な書類だからな」と念を押されており、自分でも大切に持参してきたはずなのに、なぜ、どこで失ったの？井本は、霊園の事務担当をしているミチル（麻生祐未）に対して「何とか便宜をはかってやれば」と頼んでくれたが、そんなハッキリした法律違反行為ができないのは当然。「お前はホントにバカだな！」と憲男からのバカの連呼に耐えながら、麦子は憲男に対して埋葬許可証が家にないかどうか調べてもらったが、もしあったとしても郵送すれば2、3日はかかる。逆に、もしなかったとしたら、焼き場で再発行してもらわなければならないから、さらに数日かかるはずだ。麦子にとってバイトを休むのは大したことではなかったが、痛いのは旅館代の負担。そこで、彩子の友人だったというミチルから「私、女の一人暮らしだから、良かったら私の家に泊まらな」と誘われると、麦子はその言葉に甘えさせてもらうことに。

こんな風にして、以降数日間にわたる、麦子とミチルの擬似母娘のような生活が始まったわけだが、さて、そこから見えてきた、若き日の母親・彩子像とは？

■よくできた脚本に拍手！『赤いスイートピー』に涙！■

兄妹のマンションに同居を迫ってきた彩子は一見大阪のおばちゃん風、そして厚かましが洋服を着て行動しているような小太りのおばさんだったが、五藤町のアイドル的存在だった当時の彩子はそうではなく、今の麦子と瓜二つだったらしい。そんな彩子の東京への家出騒動や、逆に夢破れて故郷に戻り、麦子を出産する時の物語、等をミチルや町の人々から少しずつ聞かされる中で、麦子の気持ちが徐々に乱れて行ったのは仕方ない。そんな麦子だから、離婚したミチルが子供と会わないまま地元に戻っていることを聞くと、酒の勢いもあって、自分の境遇をミチルの子供と重ね合わせながら、ミチルを責め立てることに……。そんな麦子を、井本が「ガキだなあ」と諭すシーンを観ていると、吉田監督が書いた脚本が実によくできていることに感心。

春男の息子・千蔵（岡山天音）と共に出かけたお祭りで、ひょんなことからライブ会場の壇上に立たされた麦子は、さすがに司会者のリクエストどおりに彩子がよく歌っていたという『赤いスイートピー』は歌えなかったが、若い頃の彩子はどんな思いでこの曲を歌っていたのだろうか。数日間にわたるこのような五藤町での経験の中で大きく成長した麦子が東京へ帰ろうとする時、松田聖子の歌う『赤いスイートピー』が劇中歌として流れてくると、思わず涙が……。よくできた脚本に拍手！そして聖子ちゃんの『赤いスイートピー』に涙！

ひとつだけ伝えたい。
「大キライだったけど、
お母さん、
ありがとう。」

麦子さんと

突然舞い戻って、
突然死んでしまったお母さん。
でも私たちとお母さんの物語は、
そこから始まる——。



堀北真希 松田龍平 漣水洋一 ガダルカナル・タカ 麻生祐未 余貴美子

監督:吉田恵輔 脚本:吉田恵輔・仁志原了

挿入曲:「赤いスイートピー」松田聖子(ソニー・ミュージックダイレクト)

制作プロダクション:スタアウェイ 製作:ファンタム・フィルム(スタアウェイ) 配給:ファンタム・フィルム ©「麦子さんと」製作委員会 (2013, 日本, カラー, 90分)

mug.ko.jp

「麦子さんと 2 枚組 特別版」 発売・販売元: TC エンタテインメント 8月6日(水) 発売
DVD 4,700円(税抜) / Blu-ray 5,700円(税抜) (C) 「麦子さんと」製作委員会